

山岳宗教の性格

小田 丙午 郎

本文の主材をなしているのは御嶽教である。この教派の資料の蒐集と整理については木内三生助手の協力を頼わしている。

一

日本全土の六五パーセントは山林地帯である。山、林、森、丘、岳、峯などの普通名詞はもちろん、山地、山間、丘陵、高原、高台などの複合語は厳密な学問的な用語として用いられているのでなく、一般国民の漠然とした、しかも複雑な山岳に対する生活感情と情緒とを表わしている。

一方幽邃、雄大、優美、崇高などの形容附加語の実体はわが国における山岳の雑多の形相や景観に結びついているのではなからうか。

日本の山岳が数々の神話を生みまた伝説を作つて来たことは今更改めて言うまでもない。山岳が詩歌の題材となり、絵画の素材となつてゐることはわが国が世界にその類が稀ではあるまいか。

山岳に山霊が宿ると言う自然信仰としての山岳崇拜はすべての原始社会に見られた現象であつた。が一六世紀後半すなわち室町時代に成立した富士講、江戸時代末期に勃興した御嶽教講などは単なる自然信仰とし

ての山岳崇拜たるにとどまらず、むしろ山岳宗教の名に値するものであろう。そうしてわが国の山岳宗教は日本の山岳と国民の宗教史的風土に育まれた特殊形体と言つて差支ないだろう。

二

環境が意識を決定するとは唯物史観の根本命題である。原始人に取つて意識を規定するもの自然であつた。自然の脅威に対しかれらは絶えず戦慄し恐怖しなければならなかつた。暴風地震洪水などの天災は言わずもがな蛇、蜥蜴恐竜のような爬虫類の襲撃による被害のイメージはかれらの深層心理に強く根ざしていたに違いない。旧約聖書の創世記に表われるアダムとエバとを惑わした蛇、八岐大蛇の物語はこの間の消息を伝えてゐると思われる。

原始人は自然に脅威を感じた。他方かれらはこれに親近を覚えた。現代には矛盾と思われるこのような心理はかれらには同時に相存したのではなかつたろうか。さもなければアルタミラの洞窟の壁面や今日未開社会に発見されるトーテムの存在理由はどのように説明されるであらうか。

今日人々に愛吟される木曾の民謡が木曾の御岳さんの愛称に始まり、夏でもお寒い。と冷感の恐しさを歌っているのもこれに類似する心理現象と見做されないか。

三

日本の原始時代もその生産は採集、狩猟そうして漁撈であった。古代日本がしかしきまき水田耕作を営むようになった時、古代人に精神革命は起った。自然に恐怖戦慄したかれらが今や一切の神秘と驚異とを大地に発見したことは容易に察せられる。萌え出る草の芽。湧き上る泉。咲く花。熟れる稲穂。これらに関連してかれらは大地をどんなに大地を礼讃したことであろう。ギリシアのデメーテルもカナンのパールももともと大地の豊穰を礼讃する心に由来していると言われる。

農耕時代に人は村落共同体を形成していた。かれらの空間的視野は限定されていた。かれらは天を仰いだ。月の光に浴した。月や星もまたかれらの眼に映じた。しかし、かれらがこれらの天体に向けた驚異と関心とは意外に少かったのではなからうか。少なくともかれらのそれに示した関心と驚異とは大地へのそれらを凌がなかったであろう。私は古代の日本文学に星が題材にされない理由を探りたい。

地―ものを産する大地―を中心として古代日本の自然像が作られているのではなからうか。古代ギリシアの天文学において宇宙の中心が地球に求められたように、かれらは村落共同体を中心とした世界像を描いたのであったろう。ではその空間の中心は何であったろうか。これに就いて私たちの興味を唆るものは山と言う字の象形性である。私たちの想定

が許されるならば、これは限られた空間の中心性と支配性とを象形していると言えないであろうか。山は漢字である。これが直ちに日本のやまとその象形的意義と語源とを同じにしているとは断定しがたいが、古代の日本人の山岳思想として受け取って誤らないであろう。山は村落共同体の中心性をなした支配性をなしていた。これには色々な意味がある。例えば古代ギリシアのポリスとの境界を劃したものは山であった。山は古代においては所謂天然の要塞であった。しかし古代の日本人には山が天然の要塞以上のものであった。それは人々に山の幸を提供した。別言すれば山は柴薪などの燃料また栗橡その他の食料品として木の実を人々に恵んだ。これは現代の私たちの理解に余ることではない。山の幸は古代人に取っては単に薪柴また木の実などに尽きなかった。現代人には雨は水蒸気の冷却、風は気流の作用として山とは無関係である。古代人にはしかしこれらは山の幸とされた。

四

山の神と言えば土俗信仰の対象として今なお山村にての名残を留めている。因に春に山から来り秋そこに帰ると信じられていた。言い替れば空間地域の中心また支配である山は神の住むところであった。ここに神（カミ）の語源を究めるのは本文の主旨ではない。カミはある人は上に由来するとし、他は鑑みに関連があると言う。カミを上とするのは政治的理念をこれに読み入れ、これを鑑みとするのは儒教的反省をそれに投射させているのではなからうか。私たちはこれを隠れ身とする宗教的解釈に賛成したい。山の神は隠れ身である。そうしてその隠れるところ

は山である。

序に森の原意はみ籠りすなわち神が籠ると言う意味であると言われる。隠れ身としての山の神の住むところとして木々に隠蔽された森こそ正しくそれに応わしい場であった。

五

山の神は普通名詞である。これは山の神が自然神であって歴史的人格でないことを意味している。そうして古代土俗社会には神と言えば山の神の自然神だけが信じられたのではなかったろうか。山の神が神々となりそれぞれの固有の名を附せられるようになったのは古代小国家群が漸次大和朝廷の中央集権が強化された後のことではなかったか。大和王朝が土蜘蛛とか熊襲とかの土族を征服し、その土地の所屬が明らかに定められた。山の神はここにおいてその地名を帯びるようになった。

紀元前三世紀アレキサンダー大王がヘレニズム世界に君臨した時、彼の名を名とした都市は何十の数に上った。アレキサンダーは神にされた。これはしかし日本の場合であらうか。

下鴨神社の祭神は大和朝廷の重臣として山城を征服した歴史的存在であったろう。しかしこの重臣も遂いに神社名を己の名を附けられなかった。この神社の名称は地名である。この意味において大和朝廷以前の土俗社会の山の神信仰は実質においてそのまま持ち続けられたのでなからうか。

「下鴨神社の正確な由来は解りません。私は祖父からこの社の前身が八瀬にあったとききました」。とは元京都府立農林専門学校校医、今

は亡き加茂県主の末裔、鴨脚光荣氏の談であった。

六

大和朝廷の本土の征服は、太陽神と山の神との対立闘争ではなかったか。例えば神武天皇が長髓彦に戦いを挑んだのは太陽神の名においてであった。

太陽神崇拜が山の神信仰をどこまで圧倒したのであったろうか。太陽が人類に光と熱とを与えるものとして、その信仰の対象となったのは古代エジプトにおいて早くもあらわれた。エジプトの王パラオは目の子孫であった。

古代エジプトにおいて太陽が信仰された課程は直ちに日本のそれであったろうか。日本においては光と熱の施与者としての太陽信仰が樹立したのは遙か後のこと、更に詳言すれば江戸時代の末期のように思われる。古代の日本においては太陽はその崇高性と普遍性において信じられたのでなかったろうか。太陽はむしろ高天原の名において人々の心を魅したのでなかった。

古代人には太陽はその出ずるところと入るところを持っていた。その事は詩篇一九篇に美わしく描かれている。古代日本人は高天原は太陽の出入する場であった。そうしてここはまた天と地との境界に位し、八百万神の集う場であった。

それはギリシアのオリムピアの山を想わせるものがある。オリムピアもまた天と地との境に位し、ゼウスを父神とする神々の座と信じられた。祝詞は高山や短山の語を繰り返す。これらの高山と短山にはそれぞれ

れの神がある。高天原がこれらの高山と短山に君臨する。祝詞は言わば大日如来に一切の諸神諸菩薩を帰属させている真言宗の曼陀羅のように高天原に一切の山岳を隷属させる図譜の観を呈している。

高天原は実在しない。それは象徴的権威しか持たない。それは支配また君臨の表徴以上のものとはならなかった。

太陽は天体に君臨する。太陽信仰は星座信仰と関連した。これはバビロンの場合であった。旧約聖書のバベルの塔はジクラットと呼ばれた。これは星座を配置した宮殿であった。さらにギリシャにおいては太陽を中心とする星座はそれぞれ地における職能に照合した。ヘルメスは航海。ヴァルカンは鍛工と言ったように。

日本においては、しかし星座の信仰は見られない。大和朝廷に仕えた氏族の祖神は星ではない。太陽の子として宣言された天照大神はわが国において太陽神としての自然宗教の域からいつの間にか血縁宗教に移され、大和朝廷の祖神と変質したのではなからうか。

七

高天原の観念は古代の山岳思想に及ぼした影響は、以上のことから、殆ど考慮さるべき余地がないだろう。古代の山岳思想に影響を与えたのはむしろ神仙術であったと言えないだろうか。

秦の始皇帝は不老不死の薬を徐福に採させた。そうしてその不老長寿のありかと言われた蓬萊島とは外ならぬ日本であるとされた古代の伝説はわれわれにも伝えられている。その上崑崙、蓬萊と瀛洲の三神山すなわち仙人の棲所が東海にあると言われた。中国の神仙術士の好奇心を唆り

日本渡来の志を起させたのはこのような中国の所伝ではなかったろうか。これはコロンブスにアメリカ大陸の発見の冒険心を刺激させたものとしてマルコポーロの東方見聞録の中のシパングに関する記事に似たものを思わせる。

八

不老長寿とはどんなことを意味したのであるうか。科学の洗礼を受けた現代人は先ず分析する。例えば水を酸素と水素との化合とするように。古代人はしかし総合的に直観した。水には水の精があると云った工合に。野菜を意味する英語の *Vegetable* の語源が活力を与える意味のラテン語の *vegeto* であるのは古代人の直観を示唆している。古代人には現代人のように食物と薬品との区別がなかった。生理現象が心理作用であったことは病気になる文字がこれを示している。

神仙術は老子に結びつけられる。老子と孔子との間に引かれる一線として老子の無為自然があげられるのは一応承認されなければならない。以上のことから私たちは不老長寿に就いて次のように言いたい。不老長寿とはある心理条件のもとに自然の霊能を自然の中において自然に従って、そうして自然から体得する生活様式である。

宗教学者は原始時代の宗教発達の第一の状態をアニミズムと呼ぶ。不老長寿はアニミズムに根ざし、アニミズムを超えたものである。

不老長寿の薬として不時香実、また桃があげられる。しかし人は黄金こそ不老長寿の霊薬であることを忘れていた。中国の錬金術は言わば不老長寿の秘術であった。

修験道が最初に始められた大峰山はまたの名を金峰山と呼ばれる。中に桃の名が仙境に附せられ桃園と名付けられるように、金の名を冠せられた金峰山は仙境の意味を匂わせていることは推察するに困難ではない。

山の幸の源としての森は仙人の棲む不老長寿の仙境として人の好奇心と冒険心を促した山岳はどのようにして人々の信仰の対象となったであろうか。日本は火山地帯である。休火山が過ぎた日の噴火爆発はどんなに人々の潜在意識を恐怖させたであろう。それだけではない。古代人には出エジプト時代のイスラエルのように深山を極めることは死神に直面することであった。承和十一年智証大師円珍が金峰山に登った時、魘魅が蔓っていた。後二十年理源は救命によって大蛇を調伏した。この史伝によれば大峰山を探ることは今日のヒマラヤ登山以上の冒険であった。現代人には登山の条件は案内者に従う登山者の体力に限られていた。しかし大峰山の登拝は体力の条件ではなくむしろ念力であった。「今日御岳に登る者に七十の老令者があり、また三十代の脱落者がある。」と御岳教中教正井上良徳氏が筆者に語ったのは去る五月の中旬のことである。

大峰の開山は役行者に始った。序に役行者は前掲の智証より百二十年前に死んだ。彼は伝説によれば大峰山において神呪を護持し、六根清浄の潔斎後この山上で金剛権現に顕示された。彼は伝奇的存在である。彼の伝説から察すれば彼は諸社諸寺を順礼し、これらの空しさとうつろさに絶望し、深山谿谷にその方向を変え遂に大峰の山霊に安住帰依したのであった。彼は仏教に暗示を与えられ、その結果は古い皮袋の婆羅門教

に定着した。彼は修験道の開祖とされている。そうして山岳宗教と言えば具体的には修験道に限定されなければならないのではなからうか。

人は平安時代の最澄と空海の弘めた天台真言の二宗を山岳仏教と言っている。なるほど天台は比叡山に、真言は高野山にその道場を持った。そうして最澄は日枝の山霊にこの宗の加護を祈願したとも伝えられている。しかし「伊勢は津で持ち、津は伊勢で持つ。尾張名古屋は城で持つ。」の都々逸に歌われるよう叡山や高野山の意義は延暦寺また金剛峰寺の故に存するのではなからうか。

修験道においては、しかし山岳はこの道の絶対比重を占めている。山岳なくして修験道なしと言っても過言ではない。山岳と山霊と行者との三位一体こそ修験道の中核である。

九

修験道は歴史宗教外に成立した。それは仏教の系譜から疎外されるだろう。それは婆羅門教に類似しながらその正統な法脈ではないだろう。それは神仙術に影響されながらその方向を異にしている。神仙術は老荘の静に根ざすとすれば修験道は動に裏づけられているような観を呈している。

なお仏者はそれぞれ法統に従って經典をよく聞きよく思いそうしてよく修めて三摩地の境を目指した。これに対し修験者は經典殊に般若心経や不動経を念誦護持して靈験の体得を期した。仏者が転迷開悟の仏果を大願したのに対し修験者は起死回生の一大勇猛心を起した。仏教の開祖が普遍的永遠的要求に応じる一代の導師である一方、修験者は即時的個

的要求に答える呪術的先達であった。

修験者の存在意義はその呪術的靈験にある。叡山や高野山にはそれぞれの法統が続いて来たのに対し大峰や御岳にはそれぞれの靈験が顕われて来た。靈験を離れた修験道は味を失った塩である。

靈験とは何であろうか。それは神仙術に絡んで触れた自然の中において自然に従って自然から得られる靈能である。修験者には水は単に酸素と水素との化合物にとどまらない。それには靈が宿る。かれらには水垢離は一般人の行水とは同一視されない。それは心身の浄化を意味する。火についても同じである。真言の護摩すなわち火をともし秘法は知によって煩惱を断つことを象徴すると言われる。修験者はこの火にそのまま靈能を信じ降魔除厄の秘術に転じたのではなからうか。このような意味では修験道と神仙術とは互いに似通っているとも言えるだろう。しかし私たちは修験道が次の点で神仙術と区別されていることを認めなければならぬ。修験道が自然の靈能を呼び起すものは呪文である。呪文が修験道において占める地位は念仏の行者の称名に比すべきものがあるのではないか。

日本の古代に言霊と言うことが文字がある。現代人には文字は記号に化しつつある。古代人には文字は霊であった。漱石を絶讃させた創世記の「神光あれと言いたまひければ光ありき。」一―三の一句は端的に言葉と靈との関係の不即不離を道破している。呪文とはこのように言葉と靈との一体性を根幹とした修行様式であったろう。言い替えれば呪文を唱えることは修験者には口の業でなく魂の行であった。呪文を離れて修験道は成り立つであろうか。

御岳教徒の現在の正経は御嶽神拝詞集である。これは読んで字のように神の拝詞である。つまりこれは祝詞である。これは、しかし、不動祈禱集を収めている。不動祈禱集は呪文ではなからうか。

一〇

修験者の意義は呪術的靈験者である。靈験とはどんなことを指すのか。これは修験者の念誦修行に応じる心霊現象である。これにより修験者は治病除厄そうして開運の神力や神知を媒介する。このような心霊現象は不断の行事ではなく、間歇的周期的な行状である。かれらが靈験を享受する時、かれらの言動は異状になる。しかしこの瞬間が過ぎれば、かれらは世の常の人となる。かれらは兒女に生まれ、酒杯をも手にする。天狗と言えば人に親しまれる一面を思わせる愛称でもある。世には神通力自在な天狗の失敗物語も伝えられている。

私たちは山岳宗教が山岳から民間に伝わった理由を山伏のこのような超人と庶民との二重の性格に見出されないであろうか。

一一

山岳宗教が自己形成するまでに数多い挑戦を経て来た。修験道の開祖役行者は時の政府の怒りを買って島流しの憂目を見た。御嶽は尾張の所領となった。幕府は尾州材の保護を名目にして留山の制を定め修験者の登拝を禁じた。これは恐らく幕府が吉野時代の山伏の所行に山岳宗教の被害妄想に陥ったものと察せられる。

御嶽教を神道十三派の一つとして公認運動と乗り出したのは下山応助

であった。しかし御岳教の礎を定めた下山応助は初代管長の榮を担うことができなかった。初代管長は言わば東上りの任命管長の覬がある。

国家権力は山岳宗教の敵であった。しかし国家権力は今は山岳宗教の最悪の敵ではない。山岳宗教は今や最後の、そうして最悪敵の襲撃に直面している。これは近代世界そのものである。十九世紀の世界は未知の陸地を一つも残さなかった。そうして現代人はこの地球の陸と海はもろろん空さえ征服しつつある。曾って人は人に服従を命じた自然は今や人に蹂躪されている。このような時代への警告として私たちの心耳を打つものはシュヴァイツァー博士の「生への畏敬」である。

十八世紀末の産業革命はまた自然革命でもある。山岳は現代において金鉱の発掘、電源の支給、用材の提供のため、それはその神秘性と崇高性を奪われて行く。往年山岳の周辺は村落また田園であった。しかしここは近代工業化のために工場地帯にまた繁華街に変わっている。

このような近代世界の挑戦に対し山岳宗教はどのように応戦して行くであろうか。これはひとり山岳宗教だけの運命ではない。大峰山の信徒は女人禁制の鉄則をあらゆる圧迫に屈せず死守している。山岳宗教はハルマケドンの戦いを戦いつつある。

οἱ πατέρες ἡμῶν ἐν τῷ τῷ ὄρει προσκυνεῖν θεῖ. λέγει ἀνθρώποι
 1 ἡσούς Ἦπίστουί ωί, γύναί, ὄτι ἔρχεται ἄρα ὄτε ὄτε ἐν τῷ ὄρει
 τούτῳ ὄτε ἐν ἱεροσολύμοις προσκυνή-στε τῷ πατριῖ.

わたし達の先祖は「このケジリム山で神を礼拝したのに、」あなた達ユダヤ人は、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。どういう訳でしょうか。」イエスが言われる、「女の人、わたしの言葉を信じなさい。間もなく、あなた達がこの山でもエルサレムでもなくどこでも、父上を拝する時が来る。

塚本虎二訳 ヨハネ福音書四、二二

「」の部分は訳者による敷衍
 小字は訳者自身の公言する敷衍訳

参 考 文 献

- 久米 邦武著 日本古代史と神道との関係
- 鶴藤 幾太著 教派神道の研究
- 和歌森太郎著 修驗道史之研究
- 〃 山 伏
- 桜井徳太郎著 日本民間信仰論
- 杉本 尚雄著 中世の神社と社領
- 第四 風土記日本 第四卷
 (関東中部)
- 木曾御嶽本教 御嶽山御由来記第一卷
 出版協会
- 新井 和 臣 吉野山
- 関根 文之助 日本精神史とキリスト教
 エリアーデ著 永遠回帰の神話
- 堀 一郎訳